



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催  
第70回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



## 心の目



和歌山県・橋本市立橋本小学校・6年

むらい ゆうき  
村井 優希

「自分だけ、楽しければいいんじゃないんだ。みんなが、毎日ニコニコしていただけるようにねがっていよう。」これは、「ブッダがせんせい」という本の一節です。

ブッダは、どんな人も、どんな生き物もわけへだてなく、みんながしあわせになってほしいと願っていました。私は、この本を祖母からもらい、母に、「何かいやだなあー」「つらいなあー」って思った時に読むようにすすめられました。母もまた、「自分もそうしているの。」と話してくれました。

私の母はお寺で育ちました。お寺には、色んな事情をかかえた人たちが来る事が多いそうです。昔、悪いことをして刑務所にいた人。つい自分の欲のためにお寺や神社のおさいせんをぬすんでしまった人。過ちをおかしてしまって、自ら命を絶ってしまった人。身よりのない人…。その度、祖父と祖母はそんな方たちに対応している姿を母は、子供のころから見てきたそうです。

その中で、母が一番印象に残っていることを話してくれました。昔、罪をおかしてしまった青年がこうせいし、結こんをして子供が産まれたので祖父と祖母に見せに来てくれたそうです。祖母は、その赤ちゃんを本当にうれしそうな顔をして抱っこしていた姿を母は忘れられないそうです。

この話を聞いた時、私は正直心の中で「え？」と、疑問に思いました。なぜなら、私だったら刑務所から出てきた人にそんな対応ができないと思ったからです。差別やへん見はダメな事だと心では分かっているけど、いざ目の前にそんな人がいたら、やさしくしなくては。でも、悪い事したんで

しよ。と心の中でかっとうすると思います。この心の中のもやもやを、母に話しました。すると、母は「正直な気持ちだと思うよ。なかなか簡単に受け入れるのは難しいよ。でも、反省し変わることでできた人に寄りそい“がんばったね”って心の支えになってあげることは大切なんじゃないかな。」とっていました。この言葉を聞いて、祖父、祖母の対応に理解でき心の目で大切なものを見る事を学びました。

私の妹は、生まれつき両目がしゃ視です。小さい頃に手術をしましたが、まだ左目だけが治っていません。ある日、学校から帰ってきて、ママに抱きついて「目がへんと言われた。」と大泣きしました。あんなに泣いた妹を見たのは初めてだったので、ものすごく悲しかったんだと思います。私は、その言葉を言った友達が許せず腹が立ちました。ママと妹に「その友達になぜそんなこといったの？と聞けば？」と言いました。二人は首をふりました。「あなたは、目の事を知っているからだけど。もし知らなかったら目の前に同じような人がいたら、心の中でその子と同じように思うかもしれないよ。だからまずは、先生に目の事をみんなに話してもらおうね。」と言って妹を抱きしめて「辛かったね。悲しかったね。」となくさめていました。私は、この事を思いだし、自分は矛盾しているなあと気づきました。自分の妹が言われた時は腹が立ち、自分は祖父母の対応に理解できず…。今一度、自分の行動を見直すべきだなと思いました。

ブッダが言ったようにみんながしあわせでいられる世の中を作るためには、私も含めこれからの社会を背負っていく人達一人一人が自分の行動に気をつけて、だれかを傷つけたりせずにやさしく、正しく、強い心の持ち主になれたらいいなあとと思いました。

そして、祖父母や母のように相手の気持ちに寄りそえる心の目を持った人になりたいと思いました。